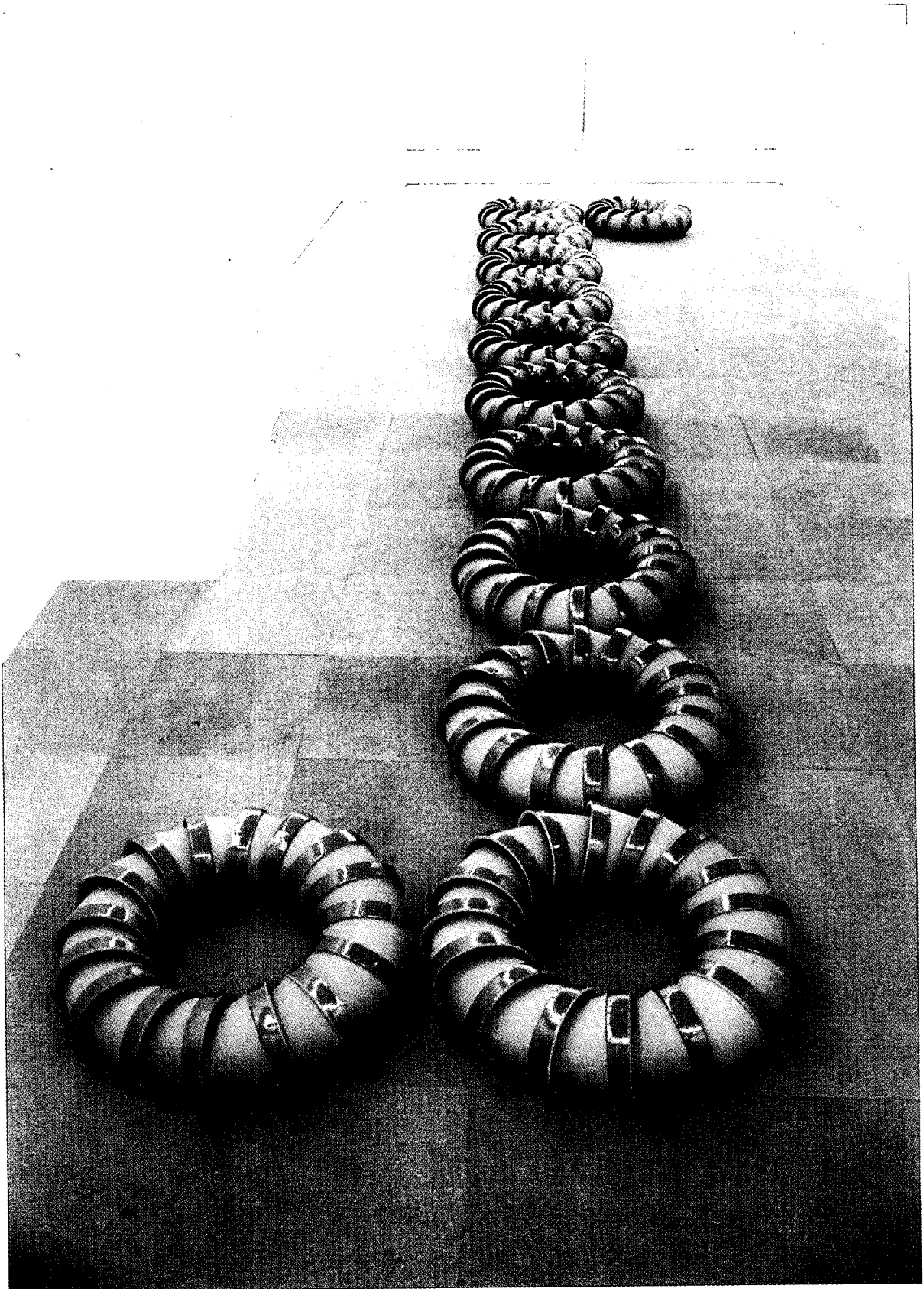


## 神吉先生を偲んで

黒髭の巨体で独特の風貌を持つ神吉さんを知ったのは大学に赴任した年、今を去る六年前のこと。八王子にある東京純心女子大学純心ギャラリーでの展覧会を見た時だ。

巨大な黄色い自動車のバンパーを縦に並べた複数コピー作品群や、多数の植木鉢を円に配置し、直列に並べたオブジェ（次頁図）、あるいは、青い慶応のペンマークを巨大にしたような壁面物体群など、この作家は、はやりの現代アートだな、との印象を持った。そして、それらを背景に異様に屹立するのは全身を碧くした一対の石膏像。しばらく見入ってしまう。若い男女像でもなく、母子像でもない。ご自身と思われる三十代の像と威厳に満ちた老人像だった。老人像の全身の碧さと内にこもる力。『おーお』。彼は同展の挨拶文で言っている。『私は、今現在数多く氾濫している作品の中で何が作品であり、また、そうではないのかを常に考えています。』

私の作品の中では「もの」を反復することにより、観者が作者の意図を汲み取ろうとしたとき、私はそれを一度拒否し、観者自身「自分は今何を観ているのだろうか」という自問自答をしてみたら、何が作品として成り得るのかを、見つけだすきっかけになる』と。常に立体造形の存在意義を模索していた、と思われる。一回りほど下の彼がムサビの彫刻と知ったのは、その後、いつしか飲みに行くような間柄になってから。あごを突き出し、お猪口を持つ格好で『フクダさあん、飲きますかあ』の独特の声。私はずうっと勤労学生。大学卒業後、夜、新橋の光風会美術研究所でクロッキー修行。通信でムサビの油絵に通い、ムサビの自由が遅まきの学生時代か。話題は当然、共通で知っている髭の安田春彦先生の厳しい、が、慈愛に満ちた教授法、「哲学者」若林奮先生の彫刻、神吉さんの心酔するガウディや彼の血から滲み出ているキリスト教彫刻、あるいは、ミケランジェロや運慶、円空などの彫刻談義。想い出すのは線の話。画家の線と彫刻家の線。画家のような無心な線が引けずに、どうしても立体的になる彫刻家の線を悩む、あるいは、依頼されたカトリック大宮教会のキリスト像の構想。皆を迎え入れるように下から広げた手のデッサンと、実現への話。とうとう、キリスト像はデッサンのままで実現しなかった。



One Size fits all

『フクダさん、今度会う時は、バルセロナのサグラダファミリアでトンテンカントンテンカンしてるからなあ』。そうか、出来なかつたら息子がやっているだろうなあ、『おう』と、遠くを眺め眼を細める。『こう、体全体を動かして物を掴むんだ、今、この場を芸術にするんだ』 そんな会話も今は出来ない。

四ヶ月経った十一月の紫祭ゆかりさい。花火の夕べのメッセージ。『神吉先生、ありがとーお』。教え子の心に残った像は、あの迫力に満ちた碧い老人像より大きく刻まれているのだろう。

### カルロス・エマヌエル・神吉善也

一九六三年、兵庫に生まれる

一九八六年、武蔵野美術大学彫刻学科卒業

一九八八年、武蔵野美術大学大学院造形研究科彫刻コース修了

一九九四年、文化庁芸術家在外研修員としてニューヨーク州立

オルバニー校エドワード・メイヤー教授のもとに

て研修（一九九五年）

一九九六年、跡見学園女子大学文学部専任講師就任。

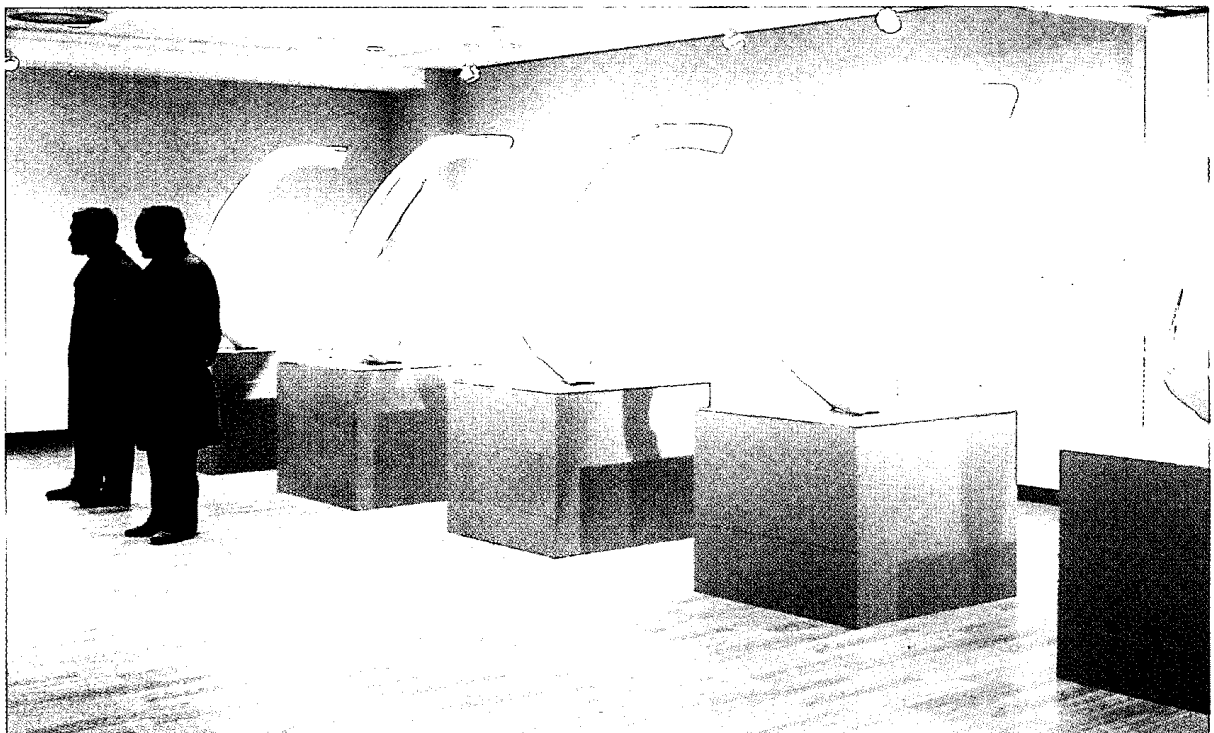
### 個展等

一九八六年、埼玉県立美術館

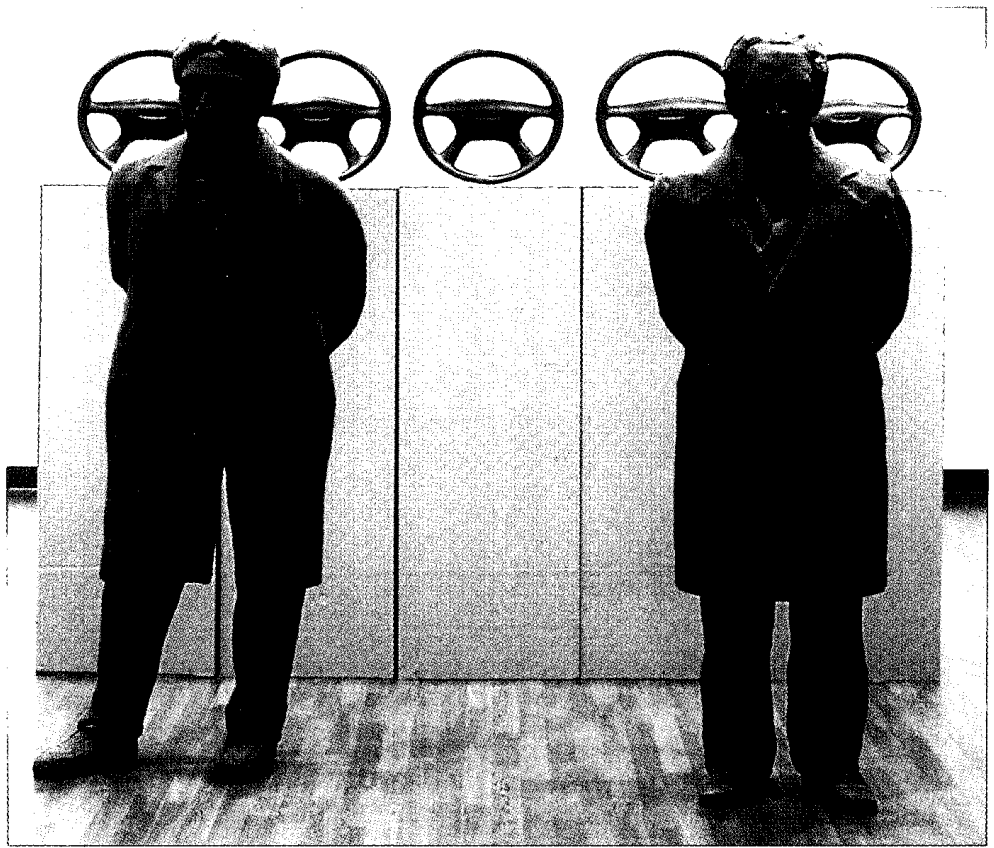
一九八八年、ギャラリー21（東京）

一九八九年、JR仙台駅コンコース内、伊達政宗騎馬像制作

ギャラリー21+葉（東京）



BLUE MEN STANDING OF A WORK OF ART-1



BLUE MEN STANDING OF A WORK OF ART-2

講談社外壁企画で第10回CSDデザイン賞装部門金  
賞受賞

講談社外壁企画で第32回SDA賞優秀賞受賞

一九九〇年、ギャラリー古川（東京）

一九九一年、ときわ画廊（東京）

一九九二年、ギャラリーK（東京）

一九九三年、横浜ガレリアペリーニの丘ギャラリー

一九九四年、Meat Market 11<sup>th</sup> Studio オープンスタジオ（ニュー

ヨーク）

一九九五年、Houston St Studio オープンスタジオ（ニューヨ

ク）

一九九八年、東京純心女子大学純心ギャラリー第二回秋季企画

展示

二〇〇二年、千葉県市原市「養老溪谷」街道沿サイナー看板ト

ータル・プラン「酪」サインのデザインと制作

#### グループ展

一九八五年、武蔵野美術大学課外センター（五人展）

一九九〇年、「変容する質量空間展」ギャラリー a M（東京）

一九九一年、ZONE アーティスト・プレゼンテーション（東京）

一九九二年、エッグ・ギャラリー（東京）

二〇〇二年、Cristinose Gallery（ニューヨーク）

二〇〇三年七月一日 昇天

故カルロス・エマヌエル神吉善也さんのご冥福をお祈り致します。

福田博同